

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 医学部医学科6年

氏 名: 有菌 奨

授業科目名	麻酔科	
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ・マインツ	
研修期間	平成30年3月17日	平成30年4月14日
〔研修を通じて得た成果〕		
<p>病院での実習を通じ、日本ではできないような多くの手技などを経験することができました。ドイツでは日本よりも学生が手技をする機会が多く、マスク換気、薬の投与、静脈ラインの確保、気管挿管など実際にさせていただきました。今までは見ているだけだったものを実際にトライしてみることで、一つ一つの難しさや、求められている正確さなどがより明確なものとなり、具体的なイメージをもてるようになりました。また、学生に多くのチャンスがある分、より積極的に取り組む姿勢が大切だと感じました。自ら働きかけることで様々な機会をいただくことができ、より充実した時間を過ごすことができました。マインツの先生方は、人工呼吸器のことや麻酔薬のことから、なぜ今このような処置をしたのかなど非常に熱心に英語で教えてくださいました。日本の学生は一人一人別の科へ実習に行くため、初めは少し不安もありましたが、先生方が本当に明るく声をかけてくださって楽しく過ごすことができました。自分のドイツ語は満足に話せる言葉が挨拶くらいでしたが、最初に元気よく挨拶することで非常に距離も縮まりより良い関係が築けるということを改めて感じました。そういった自分が全く知らない環境において、新たな繋がりや信頼関係を築いていくというのは初めての経験であり、コミュニケーションの面で今まで以上に自信をつけることができました。そのような点もこれから、特に地域での密着した医療などにおいてより活かすことができ、多くの人と交流を深め地域の活性化に貢献できると感じています。また、日本とドイツの多くの先生方、スタッフの方々の協力でこの留学が現実となり、貴重な経験ができ、自分が大きく成長できたことを、本当に心から感謝しています。この感謝を忘れず、一人前の医師になるべく、精進していきたいと思えます。</p>		
〔今後の課題〕		
<p>病院での実習中、先生方は英語で話してくださっていましたが、自分の英語力の拙さを感じました。次に海外に行くときは学生ではなく医師としていくことになるため、言語の壁は全く感じなくなる程度に英語力をつけている必要があると思えます。日本でももっと英語に触れ、日々精進していきたいです。また、自ら積極的に取り組む姿勢を、ドイツでの実習でだけのものにせず日本でも貫き、活かしていきたいです。</p>		

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 医学部6年

氏 名: 竹下有節

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ(マインツ市)
研修期間	平成30年3月16日 ~ 平成30年4月14日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私はドイツ連邦共和国のMainz市にあるUniversity Medical Center of the Johannes Gutenberg University Mainzで一ヶ月間、麻酔科臨床の研修をさせていただきました。この麻酔科は、鹿児島大学病院とは異なりごと一般外科・脳外科・循環器外科、といったように専門別に独立しており、私は一週ごとに違う専門のところに配属されることになった。</p> <p>一週目は脳神経外科に配属されたが、最初の週ということもあって麻酔臨床全般について学んだ。具体的には挿管やマスク換気、ルートの採り方などの手技を実際に経験したり、術中モニターの見方や麻酔器の使い方を学んだ。</p> <p>二週目は循環器外科に配属された。循環器の手術は長い手術が多いので導入や抜管を数多く経験することはできなかったが、その代わりに循環作動薬を中心とした薬剤の使い方を、手術中、先生方にたつぷりと指導していただいた。</p> <p>三週目は一般外科に配属され、この病院に慣れてきたこともあって、麻酔科的な手技はもちろん、医師以外のメディカルスタッフの仕事も数多く手伝わせていただき、彼らがどのような仕事をしているのかという理解が深まった。</p> <p>四週目は泌尿器科に配属され、他の科ではあまり経験できなかった硬膜外麻酔や脊髄麻酔といった局所麻酔も経験することができた。また、最後の週であったため、実際の術中の患者さんの変化がなぜ起こったかを逐一口頭試問方式で先生が質問して下さり、生理や薬理の知識の定着を図ることができた。</p> <p>全体を通して、日本ではあまり経験できない手技を数多く経験させてもらい、実際に自分が臨床の現場に出たときに活用できる技能を得た。また、実際にほぼスタッフのような扱いで研修に参加させてもらえたため、チーム医療というものを今までよりも深く実感することができた。そして、鹿児島とドイツで細かい差はあるものの、医療の質という点では差はなく、鹿児島の医療を世界に誇れるものにするには決して困難ではないと確信することができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>前述の通り、今回の研修を通じて私は様々な臨床的手技を体験し、自信を持つことができたので、臨床現場に出て間もない段階から、自ら進んで積極的に臨床的手技を行うようにしたい。また、他職種の方との連携を重視して職務につきたい。</p> <p>そして、鹿児島の医療を世界最高水準にするべく、University Medical Center of the Johannes Gutenberg University Mainzの良い点を参考にしながら、鹿児島の医療の長所を伸ばせるように工夫していきたい。また、そのためには様々な国の医療を見ることが必要だと思うので、今後も積極的に海外に出て学んでいきたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 医学部医学科6年

氏 名: 谷口梓

授業科目名	選択実習海外研修プログラム	
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ マインツ	
研修期間	平成30年3月16日	～ 平成30年4月14日
〔研修を通じて得た成果〕		
<p>海外の病院で実習することで、鹿児島とドイツの外科領域に限ってですが、体制の違いを知ることができました。例えば、手術室の配置の仕方の違いや、麻酔看護師さんという職種があり、それぞれの利点や欠点も1ヶ月の実習を通して学びました。また、実習では大学の生徒さん達と共に実習をさせていただきましたが、日本とドイツとの医学生の特徴にも違いがありました。ドイツでは、ほとんどの学生さんが看護師や薬剤師など、1度医療者として働いた経験を持つ人が多く、現役で医学部生になる人は少ないとのことで、意識や熱意の違いも感じました。</p> <p>実習に関しては、日本で実習をする以上のことが学ぶことができたと思っています。入室からリカバリールームに行くまで全ての行程で実習を行い、麻酔看護師さんと共にモニターをつけ、マスク換気や静脈ルート確保、挿管の仕方も学ぶことができました。また、麻酔中に説明していただいた際は英語でのやり取りだったので医学英語の勉強にもなりました。ポリクリでは学びきれなかったことを、海外実習でも学ぶことができたので満足しています。</p> <p>また、今回のもう1つの目標にヨーロッパの文化を知ることもあったので、休日はドイツやその他の国に行きました。1度にヨーロッパの数カ国を行ったのは初めてだったので、それぞれの国の文化やしきたりに触れることができました。</p> <p>今回の留学で海外の視点からも自分の医学部生としての姿を客観的に見ることができ、幅広い視野を持つことの重要性を学ぶことができました。今後将来医者として働く際に、今回得たものを携えて、世界に出ても恥ずかしくないような医者になり、貢献していきたいと考えております。今回、海外実習に行く目的を達成することができたことにとっても満足しています。この機会を作っていただいた先生方にはとても感謝しています。ありがとうございます。</p>		
〔研修後の抱負〕		
<p>海外実習を通して、違う文化を持つ人々と共に働く面白さを感じ、また、ドイツでは日本にはまだ浸透していない今後の医療の考えなどがありとても刺激的な実習をさせていただき、将来医者として再び海外で研修することに強い憧れを持ちました。今後の目標としては、今回の実習で感じたことを胸に刻んで、英語能力をこれからも向上させていくこと、日々の勉強に精進すること、また今後医者になった後、幅広い視野を持ち合わせた医者になれるよう様々な分野に興味を持つこと、などを目標において、日々色々なことを勉強していこうと考えています。</p>		

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 医学部医学科6年

氏 名: 宇田川 梨紗

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ・ハノーファー 国立神経科学研究所
研修期間	平成30年5月19日 ～ 平成30年6月18日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私は脳外科の実習として、ドイツ・ハノーファーにあるInternational Neuroscience Institute (INI)で一ヶ月間研修させていただきました。学生のうちから世界トップレベルの脳外科手術を間近で見られる機会はとても恵まれたことであり、また、日本と他の国の医療の違いも実感できるのではないかと思います、INIでの実習に応募しました。</p> <p>INIではベルタランフィー教授の手術を毎回見学しました。ベルタランフィー教授は頭蓋底手術や脳幹部海綿状血管腫摘出手術で世界的な権威です。非常に難しい手術をととても丁寧に、かつスピーディーにこなされる先生の技術には感銘を受けました。また、日本では行われない、患者さんが座位での手術を見るのは初めてでした。座位での後頭蓋窩開頭術では術野展開が容易であり出血量が少ないという利点がある一方で、空気塞栓などの合併症が起こり得るため、経食道心エコーで術中にモニターする必要があり、大学での実習では見ることがなかったのでとても勉強になりました。また、手術で使用されていた器具の中には日本製のものがあり、日本の技術レベルの高さを改めて感じるとともに、日本人として誇らしい気持ちになりました。</p> <p>実習以外でも、ベルタランフィー先生や先生の奥様に食事に連れて行っていただき、ドイツの美味しいトラディショナルな料理やビールをいただいたことがとても良い思い出です。台湾や中国、メキシコ等から留学されている方々にも大変お世話になり、様々な国で活躍されている医師のキャリアパスについても聞くことができました。ハノーファーでのたくさんの人との出会いが、今回の海外研修で得た大切なものの一つであると感じています。また、INIで学んだ医療とハノーファーでの異文化体験を通して得られたグローバルな視野や異文化に対するコミュニケーション能力は、今後医師として地域貢献や地域活性化に貢献する上で活かせるのではないかと考えます。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>将来は国際的に活躍できる医師を目指す私にとって、今回のドイツでの研修は非常に実りのある経験となりました。来年から研修医としてスタートを切りますが、この経験を糧に、グローバルな視点を持った医師になるべく精進したいと思います。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 医学部医学科6年

氏 名: 畠山 頌章

授業科目名	選択実習		
研修先(国・地域) 滞在地	国際神経科学研究所(ドイツ・ハノーファー)		
研修期間	平成30年5月19日	～	平成30年6月20日
〔研修を通じて得た成果〕			
<p>私はハノーファーにある、international neurosurgery institute 通称 INI で1ヶ月間の実習を行いました。INIは、その名の通り、脳神経外科の病院であり、世界中から患者さんが手術を受けに訪れる病院です。そこで、私は、脳幹部手術の世界的権威であるProf.Bertalanffyの手術を見学させていただきました。INIにはドイツだけでなく、中国や台湾、メキシコなど様々な国から先生が留学に来ており、やはり名のある施設なのだ実感しました。そこで行われる手術は難易度が高く、日本ではあまり行われない脳幹部の手術です。しかしそこでは毎日行われており、大変驚きました。術中、疑問に感じた点は、留学にきている先生に英語で質問し、理解を深めることができました。しかし、医学英語をうろ覚えだったことで、伝えるのに苦労しました。そこで私は医学英語の重要性を再認識し、少しでも語彙力をつけようと決心しました。INIで印象に残ったのは、病院の設備です。脳外科専門の病院にもかかわらず、7階建て、手術室も10室近くありました。また中国からの患者さんと話をさせていただく機会があったのですが、そこで驚いたのは病室が広く、ホテル並みだったことです。さらに病院自体も脳の形を模しており、建築物としての評価も高い様でした。他に独特だったのは手術の体位です。sitting position という、患者さんが腰掛けるような姿勢で手術を受けます。この体位の利点は、脳の体積を減らし、出血した血液も下におちるために、術野を確保しやすいということです。しかし、開放血管が心臓よりも高い位置にあるので、常にVAE(静脈空気塞栓)の可能性にさらされます。そのため手術中は経食道心エコーで音を拾い、モニターする必要があります。日本ではほとんど見たことがない体位だったのでとても新鮮でした。</p> <p>施設での実習以外でも、教授は、ヨーロッパの文化に触れなさいということで、ちょっとしたバカンスをいただきました。当たり前ですがヨーロッパは日本と違い陸続きなので、鉄道で他の国に行くことができます。そこで私たちは、隣国のフランス、オランダ、ベルギーを訪れました。どこの国も町並みが歴史に満ち、荘厳なゴシック建築の教会がそびえており、芸術が生活のとても身近にあることを感じました。またほとんどの方が母国語以外の言語も堪能に操ることができることに驚きました。</p> <p>実習の最後に、教授になぜ脳外科の道を選ぶことにしたのかと質問したのですが、その回答が私にはとても印象に残りました。それは小さいころから自分は脳外科になるのだと不思議と感じていたとの答えでした。私自身、進むべき診療科を決めきれていないのですが、この答えを聞いて、色々とは細かく考えるのはやめて、道を選ぼうと思いました。</p>			
〔研修後の抱負〕			
<p>この実習をおえて、自信がついたことは自分の語学力でした。もともと英語に関しては不得意というわけではなかったのですが、1ヶ月生活してみて日常生活において困ることはありませんでした。自分の意見や質問も相手に通じていて、とても自信になりました。しかし専門用語等は自分の語彙力不足を痛感したので、さらに磨きをかけていきたいです。鹿児島に海外から医師がきた時に、自信を持って、積極的に鹿児島の魅力や日本の医療を紹介しようという気概を持つことができました。またヨーロッパで働く医師をみて、国境は関係ないのだと教わりました。必要とされている場所に赴き、そこで最善を尽くす姿勢をもつことが大切なのだ。私も日本にとどまらず、グローバルに活躍できる人材になりたいと思います。そうして、そこで得た知識、経験を、鹿児島に持ち帰り、さらに改良を加え、鹿児島から発信していきます。そのため、今後海外に留学する機会があれば、臆することなく挑戦したいと感じました。最後にこの実習にあたって協力してくださった大吉先生、多額の資金面で協力してくださった両親に感謝申し上げます。</p>			

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 医学科・6年

氏 名: 平塚 祐真

授業科目名	選択実習
研修先 (国・地域) 滞在地	国際神経科学研究所 (ドイツ・ハノーファー)
研修期間	平成30年5月19日 ～ 平成30年6月20日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>私はドイツ・ハノーファーにある、International Neuroscience Institute (INI)にて約一か月研修させていただきました。INIでは主にprof. Bertalanffyの手術を見学させていただきました。海外研修に応募しようと思ったきっかけとしては、もともと医療における外科的治療に興味があり、5年次の実習で脳神経外科に強く興味がかかれたということがあります。将来脳神経外科医を目指すにあたって、世界でも屈指の腕前を持たれる先生方が集まるINIでの研修は、自分のキャリア形成に良い影響を与えるに違いないと思い、また、現地での生活を経験することで欧米との文化的差異を感じ取れることを期待し、申し込みさせていただきました。Prof. Bertalanffyは脳幹部手術のスペシャリストで、脳幹部の手術を見たことがなかった私にはとても新鮮で刺激的に映りました。脳幹部はその危険性から、本来手術をすべきところではないといわれることも多いにも関わらず、週に3-5回の頻度で世界中から集まった患者さんに、非常にハイレベルな手術を施行しておられました。手術の前後には、その日の手術の概要と手術の結果を私たちにもわかりやすいように説明していただきとても勉強になりました。また、Prof. Bertalanffyのもとには私たちだけでなく、中国、台湾のドクターも勉強に来られており、その先生方とも仲良くしていただき、手術中には解剖や手技に関する解説もしていただきましたし、質問にもその都度答えていただきました。私たちを指導してくださったすべての先生方のおかげで、脳神経外科に関する知識が乏しかったにもかかわらず、毎回の手術を少しではありますが理解できたと考えております。これまでの1か月間の研修で学んだことは、やはり手術を行うにあたり最も重要なのは頭頸部や脳・脊髄の詳しい解剖を完全に覚えることだと感じました。脳神経外科の手術は顕微鏡を用いて行うことが多く、時には頭頸部の深いところまではいっていくため、今自分がどこにいて周りにはどういった構造物があるかを理解していなければならず、その場の解剖が頭の中で3D的にイメージできなければ患者さんを危険にさらしてしまうため、解剖の完全な把握は絶対に必要であると学びました。また今回の研修では将来自分のスキルを地域貢献のために生かしていくにあたり、現地での生活を通してまずコミュニケーション能力を向上させることができたかと思えます。コミュニケーション能力は地域と現地の人々をつなぐ重要な要素であり、その必要性を理解し今後もその能力の向上を目指していきたいと思いました。それに加え、現地の人々の異なる文化・価値観を理解したことで、将来こちらが留学生を迎える立場になった時や海外から来られた患者さんを診療するときに活かせると考えております。このような貴重な体験をご支援していただいた先生方、学務の皆様には心より感謝申し上げます。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>解剖の学習は学生である自分でも可能なため、将来脳神経外科医を目指すにあたり今から頭頸部・脳・脊髄の解剖の学習を開始しておこうと思いました。また、海外の人々とコミュニケーションをとるにはまだまだ英語力が足りていないと感じたので、英語の学習も必要だと感じました。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 医学科6年

氏 名: 眞弓芳子

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	ソウル大学病院 小児神経科 (韓国・ソウル)
研修期間	平成30年3月17日 ～ 平成30年4月15日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>1ヶ月間、韓国のソウル大学病院で実習させていただきました。ソウル大学病院での実習を希望した理由として、現時点で神経内科に興味があり、実習可能な科に小児神経科があったこと、また元々個人的に音楽やドラマ、食事などが好きで韓国の文化に触れる機会が多く、韓国語を勉強した経験もあったこと、の2つがありました。実際に行ってみると、ソウル大学病院はまず病院の規模が非常に大きく、小児科病棟だけでひとつの建物になっていました。そして担当して下さった教授が女性の先生で、留学経験があり韓国語の他に英語と日本語も話することができる方だったので、とても心強かったです。実習は、病棟でのカンファレンスや回診に参加すること、外来を見学すること、の2つが中心でした。カンファレンスや回診では、私がわからなくて困ることがないように教授や先生方が英語や日本語で説明を加えて下さることもありました。外来見学では、今まで聞いたことのない疾患の患者さんも多くいらっしゃり、やはりそこはソウル大学病院が韓国での最後の砦のようなものなのだろうと感じました。初めて見る症例もたくさんあり、合間に教授が説明して下さったりしたので、勉強になると同時にとても印象に残りました。外来での患者さんと結び付けて、ラボで行っている研究についても説明して下さったので、今まで全く考えていなかった研究についても少し興味が湧きました。最後の週には、入院患者さんの一人についてケースプレゼンテーションを行いました。英語でスライドを作るのも発表するのも初めての経験で緊張しましたが、先生方のアドバイスのおかげで概ねうまくいったので良かったと思います。また入院患者さんの協力で神経診察を取らせていただきました。韓国語で指示を出すのが難しかったですが、ここでも先生が隣について助言して下さったので一通りこなすことができました。勉強面以外でも、先生方が日本から一人で来ている私を心配して、実習の合間に散歩に連れ出してくださったり、夕食をご一緒させていただいたりということがよくありました。韓国で有名な物や美味しいご飯、食事の際の決まりや韓国の国民性など、本当に色々なことを教えていただきました。少し旅行に来ただけでは分からないようなこともたくさん聞くことができとても興味深かったです。私自身の韓国語も、先生方やお店の方々との関わりを通じて、聞くこともそうですが特に話すことについて上達したと感じています。また休日には他国の留学生と一緒に観光地に出掛けたりしましたが、その際には英語を使用していたので、英語も少し上達しました。今回、日本にいてはできなかったこのような経験をたくさんさせていただいて、本当に勉強になったと感じますし、本当に楽しかったです。特に勉強面でもその他の面でも、非常に多くのことを教えてくださり、また私の拙い韓国語を理解しようとして下さった教授と指導医の先生方にはとても感謝しています。行く直前には不安もありましたが、今は心から行って良かったと思います。ありがとうございました。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>研修を通じて、さらに神経分野に関心を持つことができました。また、神経分野ではまだ原因がわからない疾患や原因遺伝子がわかっても治療法のない疾患が多くあり、そのような疾患の解明に向けて先生方が研究されているということを改めて知り、臨床だけでなく研究についても少し学んでみたいと感じました。まだ漠然と考えている進路ではありますが、まずは国家試験があるので、合格して医師となれるようしっかり勉強していきたいです。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 6年

氏 名: 白木 亮太郎

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	ディポネゴロ大学 脳神経外科 (インドネシア・スマラン、ジェパラ)
研修期間	平成30年4月13日 ～ 平成30年5月20日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回、私は脳神経外科のクリカルクラークシップのプログラムで、5週間インドネシアでの研修を行いました。ディポネゴロ大学との交換留学という形で、同大学の学生と共に実習を受けました。最初の3週間はスマランという都市にあるDr. カリアジ病院にて脳神経外科にて手術の見学や講義を現地の学生と共に受けました。夜は学生と共に救急部にて夜勤も体験しました。次の1週間は、ジェパラという都市に場所を移し、フィールドワークを通して公衆衛生や地域医療を学びました。最後の1週間は再びスマランに戻り熱帯感染症や内科の実習を行いました。脳神経外科では多くの手術を見学することができました。今回の実習期間中では脳腫瘍の摘出術や、脊椎の手術を見学しました。日本では脊椎や脊髄の手術は整形外科が担当しますがインドネシアでは脳神経外科が担当するようでした。救急部では患者の数が多く、特に外傷患者の多さが印象的でした。インドネシアは日本以上の車社会で、特に二輪車に乗る人が多いからか交通外傷の症例も多く経験しました。学生は医師の指示のもと、患者やその家族から問診をとり、骨折した患部の固定や、虫に刺された患者に破傷風ワクチンを注射するなどの医療行為も行っていました。ジェパラでの公衆衛生の実習は小児の健康診断や予防接種、妊婦の栄養調査などを実際に田舎の村に行き見学しました。そこでは日本とは違うインドネシアの栄養事情があり、食文化の違いを知ることができました。最後の1週間では内科の実習を行いました。熱帯感染症内科や呼吸器内科、内分泌内科などで主に外来の現場を見学しました。実習期間がちょうどラマダーンの開始と重なり、糖尿病患者に医師が断食中の食生活について指導を行っている場面も見学できました。イスラム教徒のほとんどいない日本ではめったに見ることのできないもので、非常に興味深かったです。5週間の実習では日本とインドネシアの医療現場を比較しつつ、文化、宗教等に関係した医療を経験できたことは大きな勉強になりました。また、インドネシアでの地域医療を学び、現地の人々と交流を深めることができ、地域貢献や地域活性化におけるグローバルな視点を得ることが出来ました。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回、海外の病院で実習をするというとても貴重な機会を頂き、医学の勉強のみならず日本の医療との違いを身をもって経験できたことは、これからの医療者として働くうえで糧となると思います。インドネシアの学生はみな母国語ではない英語を流暢に使いこなしており、医学英語の勉強の重要性を痛感しました。また、救急部での実習では学生が問診をしたり処置を行ったりなどして次のようなことができるかを話し合っており、実践的な勉強をしている様子が印象的でした。クリカルクラークシップでの実習は残りわずかですが、臨床現場で医師がどのように考え治療をしているかなどをもっと深く考えていきたいと思いました。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 医学科6年

氏 名: 光廣 直貴

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	ディポネゴロ大学(インドネシア・スマラン)
研修期間	平成30年4月20日 ~ 平成30年5月19日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>この度、インドネシアジャワ州の中心部であるSemarangにあるDiponegoro Universityで1か月研修させていただきました。この研修での私の目標は、1英語でのディスカッションを行う、2熱帯医学に触れる、3異文化交流を行う、ということでした。まず英語でのディスカッションは、目標というよりも必然的に行う必要がありました。彼らは当然インドネシア語で日々の診療を進めており、私が理解するのは無理があります。そこで、質問があったら英語で積極的に質問し、ディスカッションを行うことにしました。インドネシア語がわからないのでそのまましておくのではなく、英語でのディスカッションを積極的に持ち掛けることで、言語の壁を越えられたような気がします。それまで全く内容がわかっていなかったのに、英語で話し始めた瞬間にお互いの認識が一致したときは、とても気持ち良く、英語の威力を再認識しました。</p> <p>熱帯医学に触れるという目標は残念ながらあまり達成できませんでした。しかしそもそもこの目標は私の勘違い、すなわち「インドネシアは途上国であり、また熱帯に位置する国なので熱帯感染症が多い」という考えから生じたものということが明らかになりました。インドネシアは世界の中でも急成長を遂げている国であり、また衛生状態も劇的に改善されており、感染症の発生率もどんどん下がっています。私の中にあったいわゆる「途上国」のステレオタイプを打破できたという点では、非常に有意義な経験であったと思います。とはいえ、やはりHIVや結核などの感染率は日本よりも高く、結核感染後患者の診察などは非常に有意義な経験となりました。また対照的に、糖尿病や高血圧などの患者も増加していることを知りました。またラマダン中は薬も飲めないことから糖尿病治療薬の処方の方も変化することを学びました。途上国も日本と同じようなNCDが増加しており、インドネシアの医療が感染症からNCDへシフトしていることを実感しました。</p> <p>最後に異文化交流を行うという点は、達成できたと思います。平日も夜は地元のレストランでごはんを食べるようにし、休日は学生や先生と外出することができました。またインドネシアの結婚式にも参加することができ、普通の旅行では経験できないようなことに多く触れることができました。</p> <p>さてではこの経験をどのように日本で生かしていくかを考えなければなりません。</p> <p>多くの人は途上国の医療と日本の医療を分けて議論しがちですが、私はそうは思いません。なぜなら、日本国内ですら地域差があり、さまざまな文化、風習があるからです。</p> <p>特に鹿児島は離島のほうに行けば行くほどその地域特有の文化、言葉があり、それらに迅速に適応していく能力が求められます。インドネシアで経験した異文化に適応する能力は、このような環境で必ず役に立つでしょう。</p> <p>またこれから先、日本でも外国人診療をおこなう機会が増えてくると思います。外国人が行くのは都会だけだと思われがちですが、自然が豊富な鹿児島、とくに奄美大島などの離島では、これからどんどん外国人が増えてくるでしょう。すなわち、都会にいても、へき地においても英語は話せなければいけません。今回インドネシアで医学において英語をどのように運営するかを学びました。</p> <p>最後に、感染症についても同様です。デング熱が日本に入ってきて議論になりましたが、世界中どこでも24時間、すなわち1日以内に移動できてしまうこの世の中、誰がどんな感染症を持って日本に入国してくるかわかりません。とくにアジアからの感染症の持ち込みはこれからどんどん増えてくることでしょう。このために、いくら日本にない感染症でも、日本からインドネシアや中国、インド、フィリピンなどに出向いてそこで流行している感染症のことを学ぶことは必須になってくると思います。今回はインドネシアのみでしたが、インドネシアでの感染症対策などを知ることができました。これは例えばインドネシアから帰国した日本人であったり、インドネシアから来日したインドネシア人での渡航感染症を考えるうえで素晴らしい経験となることでしょう。</p> <p>今回のインドネシアの経験では、一見日本の医療とは関係ない途上国の医療現場での経験をどのように日本での活動に生かすかを学ぶよい経験となりました。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今後の目標は、英語の勉強を引き続き頑張ること、そして勉強への姿勢を改めることです。インドネシアの医学部の入試にはTOEFLが課されるため、基本的にほとんどすべての学生が英語を話すことができます。また非常に実習が厳しく、実習、レポート、プレゼンテーションと日本人の何倍もの課題を処理しています。中にはインドネシア語の教科書は使わず、英語の教科書を用いて世界レベルの勉強をこなしている学生もいました。なんとなく「日本の医学部にいればそれなりの勉強はできているだろう」という考えを持っていましたが、インドネシア人のほうがよっぽどレベルが高い勉強をしていることを実感し、今後は自分の考えを改め、精進していきたいと思います。</p>	